

国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群

弥勒寺跡

講堂跡発掘調査 平成9・10年度



2009

関市教育委員会

国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群

弥勒寺跡

講堂跡発掘調査 平成9・10年度

2009

関市教育委員会

序

関市池尻に所在する弥勒寺跡は、当地方の伝統的古代豪族ムゲツ氏の氏寺として昭和34年に国史跡の指定を受けました。西暦672（天武元）年の壬申の乱では、美濃勢の活躍により大海人皇子軍が戦いに勝利しますが、この立役者となったのが身毛君広ら美濃出身の舎人たちでした。この功績により「弥勒寺」が成立したと考えられています。関市では、昭和55年に史跡弥勒寺跡の保存管理計画を策定し、これに基づいて平成3年より史跡の公有化を進めると共に、平成6年からは史跡整備の一環として弥勒寺東遺跡の発掘調査にも着手しました。その結果、整然と倉が並び立つ正倉院や国府の政庁に引けを取らない立派な郡庁院などが発見され、武義郡の行政府である武義郡衙跡であることが明らかになりました。さらに平成14年には関市円空館建設に伴う弥勒寺西遺跡の発掘調査によって祭祀跡が明らかになり、寺院・郡衙・祭祀跡が一体で良好に残る全国的にも稀な遺跡群として注目を集めています。美濃の古代史解明のみならず、我が国の古代史研究に欠くことのできない重要遺跡として、平成19年2月には弥勒寺東遺跡が国史跡の追加指定を受け、名称も弥勒寺官衙遺跡群と改められました。

本書は、平成9年度と平成10年度に実施した弥勒寺跡講堂跡の発掘調査報告書です。今後も関連する遺構の調査を行い遺跡全体の解明を進めるとともに、郷土の歴史を学習する場、様々な活動の拠点として活用していただけるよう整備を進めていきたいと考えています。調査に際しまして、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様や関係者の皆様に対しまして、末筆ながら厚くお礼を申し上げますと共に、引き続きご助力を賜りますよう改めてお願い申し上げます。

平成21年2月

関市教育委員会

教育長 遠藤俊三

例 言

1. 本書は、関市教育委員会が平成9(1997)年度と平成10(1998)年度に岐阜県文化財保護費補助金を受けて実施した弥勒寺跡講堂跡の発掘調査報告書である。
2. 平成9年度の調査は、平成10(1998)年1月7日から2月19日に、平成10年度の調査は、同年12月18日から平成11(1999)年3月30日にかけて行った。

3. 本調査は、下記の体制で実施した。※(平成9・10年当時)

調査指導 八賀 晋(三重大学名誉教授)

委員会 森 郁夫(帝塚山大学教授)

松村恵司(奈良文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部 考古第二調査室長)

高瀬要一(奈良文化財研究所 文化遺産研究部 遺跡研究室長)

早川万年(岐阜大学助教授)

坂井秀弥(文化庁文化財部記念物課 埋蔵部門主任調査官)

川部 誠(岐阜県教育委員会文化課史跡担当)

事務局 関市教育委員会 文化課

調査主任 篠原英政(課長補佐)

同 補 佐 田中弘志(主査)

伊藤 聡(書記)

調査員 高井道和(囑託)

加納英子

調査補助 高木恵子

整理作業 近藤大典(主査 平成19年度)

石原美帆 川角ひとみ 高井昌子 高橋紀美 平田汎子 森 許良 吉田まなみ

4. 発掘作業は、社団法人 関市シルバー人材センターに委託して行った。
5. 国指定史跡としての名称「弥勒寺跡附丸山古窯跡」は、平成19年2月以降、弥勒寺東遺跡の追加指定により、両遺跡を一体化して「弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺官衙遺跡 弥勒寺跡 丸山古窯跡」と改められた。
6. 出土遺物及び調査記録は、関市教育委員会が保管し公開している。
7. 本書の執筆・編集は、篠原(現 財団法人 関市公共施設振興事業団)が行い、田中・加納・森が編集を補佐した。

本文目次

I 調査の概要	1 弥勒寺跡について……………1	3 調査の経過……………2
	2 発掘調査に至る経緯……………2	
II 遺 構	1 講堂跡……………3	2 その他の遺構……………3
III 遺 物	1 瓦……………6	7 中世土師質土器……………10
	2 螺髪……………8	8 中世美濃須衛陶器……………10
	3 須恵器……………8	9 中国陶磁……………10
	4 灰釉陶器……………9	10 山茶碗……………11
	5 緑釉陶器……………9	11 中世陶器……………11
	6 平安土師器……………9	12 その他……………11
IV 結 語	1 講堂について ……………12	3 灰釉陶器にみる「大寺」の墨書……………13
	2 螺髪について ……………12	4 新種の軒丸瓦について……………13

挿図目次

第1図	弥勒寺跡位置図……………1
第2図	発掘調査区設定図……………2
第3図	発掘調査区実測図……………4
第4図	講堂復元図……………12
第5図	遺物実測図1 軒丸瓦(1～11)……………16
第6図	遺物実測図2 軒丸瓦丸瓦部(12)・軒平瓦(13～17)……………17
第7図	遺物実測図3 丸瓦(18～21)・平瓦(22～29)……………18
第8図	遺物実測図4 螺髪(30～46)……………19
第9図	遺物実測図5 須恵器(47～66)・灰釉陶器(67～73)……………20
第10図	遺物実測図6 灰釉陶器(74～98)……………21
	緑釉陶器(99・100)……………21
第11図	遺物実測図7 平安土師器(101～117)……………22
	中世土師質土器(118～133)……………22
	中世美濃須衛陶器(134)……………22
	中国陶磁(135・136)……………22
第12図	遺物実測図8 山茶碗(137～159)……………23
第13図	遺物実測図9 古瀬戸(160～166)・常滑(167)……………24
	五輪塔(168・169)・寛永通宝(170)……………24

図版目次

図版1	遺構
図版2	遺構
図版3	遺構
図版4	遺物 (1～8)
図版5	遺物 (9～17)
図版6	遺物 (18～28)
図版7	遺物 (29～46)
図版8	遺物 (47～58)
図版9	遺物 (59～64)
図版10	遺物 (65～73)
図版11	遺物 (74～84)
図版12	遺物 (85～98)
図版13	遺物 (99～109)
図版14	遺物 (110～133)
図版15	遺物 (134～143)
図版16	遺物 (144～159)
図版17	遺物 (160～170)

表目次

第1表	瓦の分類表……………6
第2表	瓦以外の遺物分類表……………8
第3表	螺髪出土遺跡一覧表……………14

I 調査の概要

1 弥勒寺跡について

弥勒寺跡は、岐阜県関市池尻字弥勒寺に所在する。本史跡は、石田茂作氏の指導のもと、昭和28(1953)年と昭和31(1956)年に関市教育委員会により発掘調査が実施され、東に塔を、西に金堂を、その背後に講堂を配する、いわゆる法起寺式の伽藍が判明し、昭和34(1959)年に美濃市の丸山古窯跡を附けたりとして、400尺(121.2m)四方の14,689.44㎡が国指定史跡となった。

昭和54(1979)年10月に史跡整備を目指して、弥勒寺跡保存管理計画策定委員会が立ち上げられ、昭和55(1980)年3月には保存管理計画が策定された。公有化に先立ち、寺域の範囲を確定することが急務となり、昭和62(1987)年～平成元(1989)年にかけて、3次にわたる範囲確認発掘調査を国庫補助事業として実施した。その結果、指定区域の南外側には掘立柱塀と、それに取り付く南門と見られる建物跡が、西側では指定区域の外側で、竈に平瓦を用いた竪穴建物が見つかるなど、寺域がもっと広いことが判明し、南と西側で、2,138.93㎡が追加指定された。東側は、古代の溝跡が見つかったものの、寺域の中軸線とずれており、寺域を画する性格の溝とは判定されず、こちら側は追加指定はされなかったが、東に設定したDトレンチに2棟の総柱礎石建物が見つかったことや、東側一帯の畑地で須恵器が採集されるため、東側一帯を弥勒寺東遺跡と命名し、岐阜県の遺跡台帳に登録した。当時、Dトレンチで見つかった溝は古代のものと判定できたが、総柱礎石建物の時期や性格は評価できぬままであった。その後、弥勒寺東遺跡の発掘調査が平成6(1994)年～平成13(2001)年にかけて行われ、その結果、この溝は正倉院を囲む溝跡であり、2棟の建物は正倉であることが判明し、郡衙の発見へ



第1図 弥勒寺跡位置図

Ⅱ 遺 構

1 講堂跡

平成元(1989)年のⅡトレンチの調査により、講堂の基壇と礎石が遺存することが分かっていたので、今回の調査は、その規模の把握を目的とした。

Ⅱトレンチの所見で、礎石Bの北側の集石を伴う溝を講堂基壇の北側の雨落溝と推定していたが、その西側のW3N9区とW2N9区に、礎石が見つかり、雨落溝と推定していた部分は中世段階の溝状部分と判明した。その他、礎石Aや根石が各所で検出でき、講堂建物規模の推定が可能となった。

残念ながら、二枚目の水田の状況から、一枚目の水田面がほぼ基壇面であることが分かり、一枚目の水田下は、根石の残骸が残る程度で、礎石はすべて移動しており、水田の畔にも使用されている。二枚目の水田下に残る基壇面には数cm大の玉砂利が敷かれ、その間からは多くの山茶碗片が出土した。また、幅1m程の溝が基壇を切って作られており、やはり内部から山茶碗片が出土し、中世の時期の改変が著しい。南辺には焼土や集石が散乱し、火災の様子が見て取れる。集石の中には、ごく一部に人工的な石列が遺存する。講堂の南側に取り付く階段を想像させるが、元位置を保たないと判定できる石を取りのぞき、詳細な検討を要するが今回はその時間的余裕が無かった。

西側では、W3N7区に西側の雨落溝の輪郭と見られる部分が見つかった。

これまで、講堂に回廊が取り付くものと推測されていたが、今回の調査結果では、そのような遺構は検出できなかった。また、北辺には柱穴風の土坑が東西方向に並んで見つかったが、詳細を検討し切れていない。

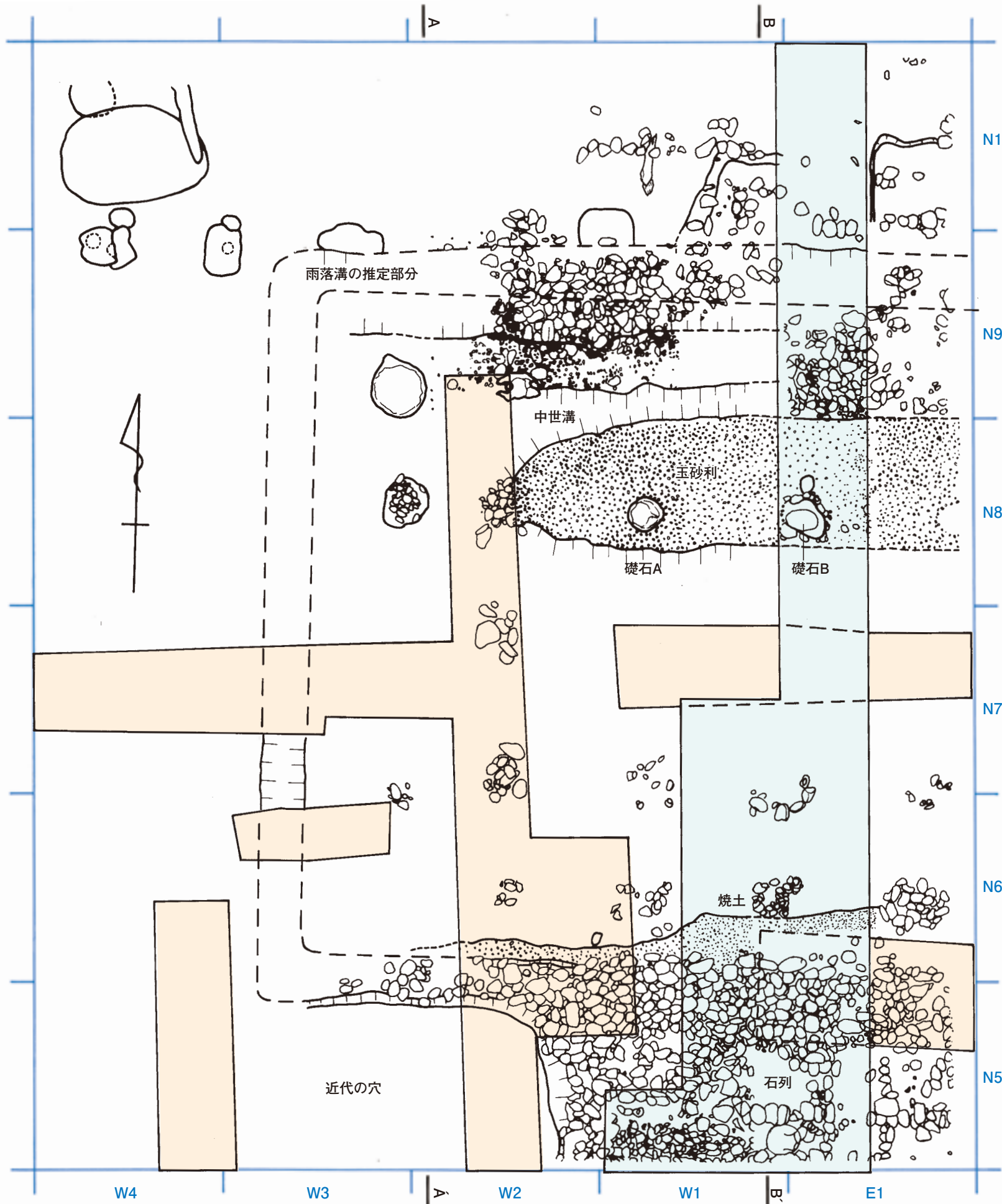
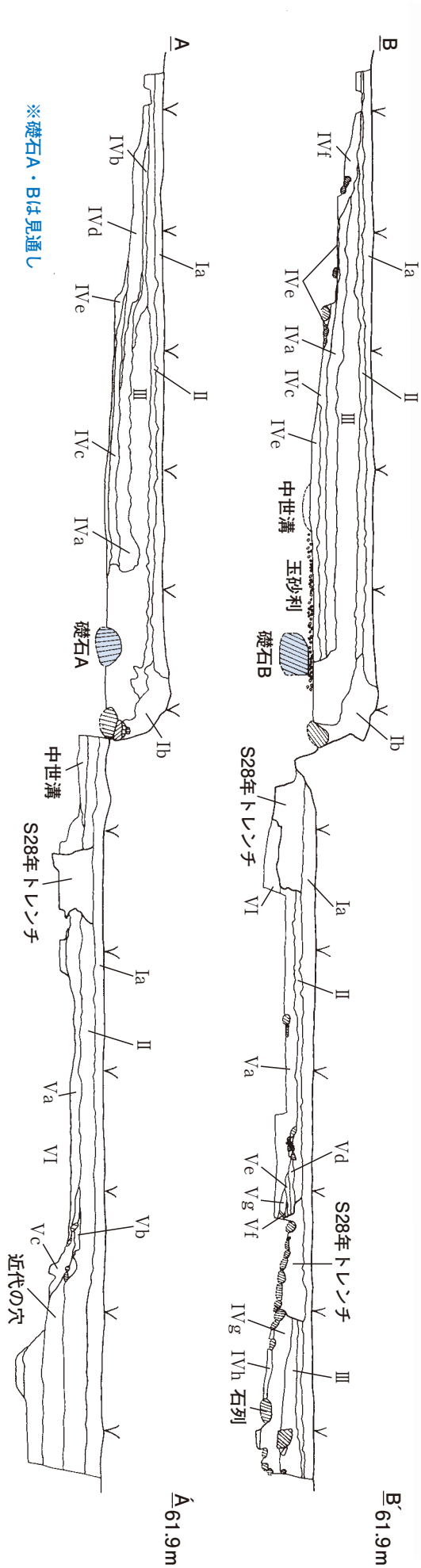
以上の所見を総合すると、講堂は、東西約24m、南北約14mの基壇上に立ち、検出した礎石や根石の配置から、桁行7間、梁行4間の四面庇付きの建物で、四面には幅1m程の雨落溝が巡るものと考えられる。身舎は、桁行5間(15m)、梁行2間(6m)で、柱間は3m等間を測る。庇の出は2.4mを測る。

これまで、塔と金堂の配置から計測されている伽藍の主軸は、真北より、北で西へ1°44′振れていたが、今回調査した講堂の主軸方向は、これまで使用してきた主軸より、北で東へ1°30′程度振れ、真北との差は、14′程度となり、極めて真北に近いものと見られる。

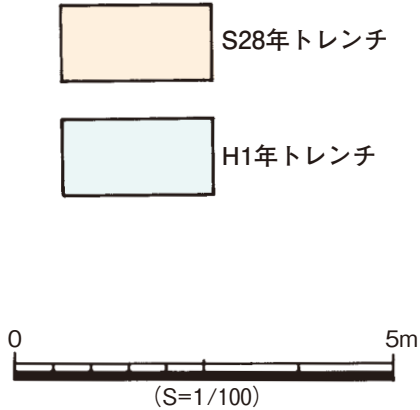
2 その他の遺構

前述のように、基壇の上面にちりばめられた3cm前後の玉石や基壇を切る溝と、それらに伴出する山茶碗の存在は、室町期に古代の遺構が大きく改変されたことが分る。また、中世の美濃須衛の典型的な水注には骨片が入っていたことや、五輪塔が見つかるなど、古代以後、中世に様々な形で、仏教に関連した葬送行為が行われていたことを物語っている。

周知のように、南北朝時代の揖斐郡横蔵寺の文書に「池尻郷弥勒寺」とあり、調査区域を広げれば、中世における「弥勒寺」の具体的様相も描けるようになるであろう。



I a	耕 作 土	灰褐色砂質土
I b	畦	
II	水 田 敷	灰褐色砂質土で茶褐色粒（鉄分の沈着）が多く、粘性の強い所や、黄灰褐色砂質土に茶褐色土が混入する所や、灰褐色砂質土に炭が少々と1 cm大の黄色粒が若干混入し山茶碗を包含する所や、黄色砂質土で1～2 cm大の黄白色山石が多い所など場所によって様々。
III	客 土	灰褐・灰白・黒褐・黄褐色土が5 cm大のブロック状で混在し、粘性が強く瓦の出土が多い。
IV a	覆 土	灰黒色砂質土に茶褐色粒（鉄分の沈着）と炭が少々混入し、粘性が強い。
IV b	〃	IV a より黒味が淡い灰褐色砂質土で、鉄分の浸みと1 cm大の山石が多く、3 cm大の黒褐色土がブロック状に所々入り、粘性が強い。
IV c	〃	灰白褐色粘質土に茶褐色粒（鉄分の沈着）と1 cm大の山石が多く、炭が少々混入し、粘性が強く水分が多い。
IV d	〃	灰白色砂質土でIV c より白味が強く粘性も強い。
IV e	〃	灰青色砂質土に茶褐色粒（鉄分の沈着）が少々と炭が若干混入し、粘性が強い。
IV f	〃	暗褐色砂質土に山石が少々混入する。
IV g	〃	暗褐色砂質土に黄色粒が少々混入する。
IV h	〃	IV g に炭が少々混入する。
V a	講堂基壇	茶色味を帯びた灰褐色砂質土で2～5 cm大の黄色粒とブロックが多く、黒色粒が少々混入し、瓦を包含する。
V b	〃	V c より焦げ茶色を呈し、炭が多く混入する。（焼けた灰が堆積した層）
V c	〃	V a が焼けて茶色味を帯び、炭が混入し、瓦を包含する。
V d	〃	黄褐色砂質の焼土に黄白色の山石と炭が多く混入する。
V e	〃	黒褐色の焼土で炭が密集する。
V f	〃	V a に似た灰褐色砂質土に黄色粒が混入する。
V g	〃	灰黒色砂質土
VI	地 山	灰白色粘土で黄褐色の所や、灰褐色砂質土で鉄分が多く白色の山石の崩壊したものが多い所や、灰青色砂質土で1～3 cm大の黄色粒が少々混入する所や、黄白色粘土の所など場所によって様々。



第3図 発掘調査区実測図

Ⅲ 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、瓦が12,720点、瓦以外のものは10,330点、合計23,050点を数える。本書には170点を選び第4図～第12図と図版4～図版17に示した。遺物の大半は、江戸期と見られる開田時の客土中に含まれるもので、古代の遺物は、ほとんど元位置を保つものは無い。中世の遺物も、講堂基壇に掘り込まれた溝中の山茶碗などの一部が元位置を保つに過ぎない。

特に注目されるのは、① 軒丸瓦で2種類の新形式のものが確認されたこと、② 16点の螺髪が出土したこと、③「大寺」の墨書のある灰釉陶器が出土したこと、④ 緑釉の皿と火舎が出土したことの4点である。

1 瓦(第5～7図1～29、図版4～7)

今回の調査で出土した瓦の種類と点数は第1表のごとくで、総数12,720点を数える。これまでに弥勒寺跡関係の発掘調査報告書で詳細な報告をしているので、ここでは簡単な説明を加えるに留める。

A 軒丸瓦(1～12)

(1～3)はⅠ類の面違鋸歯文軒丸瓦で、Ⅱ類の線鋸歯文軒丸瓦と比較して決定的な相違点が3つある。第1点は、Ⅰ類の外縁は、まさに実際の鋸の歯のように互い違いの面からなる。Ⅱ類ではそれが

第1表 瓦の分類表

分類	分 類		過去の計	H 9	H 10	H 9・10計	合 計
軒 丸 瓦	Ⅰ類	面違 鋸歯文縁 複弁8弁(蓮子1+5+9)	9	2	1	3	12
	Ⅱ類	線 鋸歯文縁 複弁8弁(蓮子1+5+10)	70	60	19	79	149
	Ⅲ類	素文縁 単弁6弁	0	1	0	1	1
	Ⅳ類	素文縁 単弁8弁	0	2	0	2	2
	不明		19	11	15	26	45
	丸瓦部		15	41	0	41	56
	小 計		113	117	35	152	265
	Ⅰ類	四重弧文 顎無文	67	91	21	112	179
	Ⅱ類	四重弧文 顎波文	29	8	3	11	40
	不明		24	28	19	47	71
軒 平 瓦	小 計		120	127	43	170	290
	Ⅰ類	玉縁式	179	163	110	273	452
	Ⅱ類	行基式	16	26	19	45	61
	不明		2,496	1,363	713	2,076	4,572
	小 計		2,691	1,552	842	2,394	5,085
平 瓦	Ⅰ類 凸面布目		2,336	2,060	896	2,956	5,292
	Ⅱ類 凹面布目	a 凸面 斜格子	239	112	74	186	425
		b 凸面 縄 目	580	254	201	455	1,035
		c 凸面 平 滑	383	217	230	447	830
		不 明	567	469	200	669	1,236
	不明		1,226	2,127	794	2,921	4,147
不 明	小 計		5,331	5,239	2,395	7,634	12,965
	丸瓦・平瓦の区別が不可能		3,047	907	1,463	2,370	5,417
	合 計		11,302	7,942	4,778	12,720	24,022

注：表中の「過去の計」とは、昭和28・31・62・63・平成元年度の出土瓦の合計数。「H 9・H 10計」は、今回の調査で出土した瓦の合計数。「合計」は、これまでの発掘調査で出土した瓦の総数。

簡素化された線状の文様となる。第2点は、花卉がⅡ類は平坦であるのに対してⅠ類は反る。第3点は、中房の蓮子の配置の違いで、Ⅱ類は1 + 5 + 10で蓮子が接するほど密度が高いが、Ⅰ類は1 + 5 + 9で蓮子が接することなく配置される。この3点に注目すれば、細片でもⅠ類とⅡ類の区別は容易である。

なお、Ⅱ類(4～8)の範は、以前の報告書でも指摘したが、使用のある段階で範の一部が欠け、(4・5・6)などで範欠けが確認できる(図版4)。今回、Ⅰ類の破片が少なかったため、Ⅰ類とⅡ類の割合は、7.5%対92.5%で、Ⅰ類の占める割合が4%近く過去のデータより下がった。

軒丸瓦にまつわる最大のトピックスは、過去の調査で出土が報じられていながら、実物が行くえ知れずの、素文縁単弁6弁の軒丸瓦の遺存度の高いもの(9)がついに出土したことである。直径は16.4cm、中房の直径は2.8cm前後で蓮子はない。

また、もう一種の新種(10・11)が見つかったことである。遺存度が低く、花卉と間弁の関係が不明瞭であるが、8弁のようである。中房は二重の同心円凸帯で表し、1 + 6と推定される蓮子を配する。外縁は素文でその内側には、連珠を推定28個連ねた文様が配される。

(12)は内外面に補強粘土が付着し、端部に接合を強化するためと推定される刺突痕があり、軒丸瓦の丸瓦部と見られるものである。これまで刺突痕は確認しておらず初見資料である。

B 軒平瓦(13～17)

軒平瓦は、いずれも四重弧文であるが、顎に波文のあるもの(13)をⅠ類、波文の無いもの(14～17)をⅡ類と分類している。Ⅱ類が8割程度を占め圧倒的に多い。Ⅱ類の顎の長さは、長短様々で、図示したものでは、(14)は9.6cm、(15)は10.0cm、(16)は8.4cm、(17)は8.6cmである。ちなみにⅠ類の(13)は顎の長さが6.8cmである。

C 丸瓦(18～21)

行基式(21)のものは少数派で、いわゆる玉縁式のもの(18～20)が9割近くを占める。玉縁式の中でも、内側の断面形(製作時の型枠の外形)が怒り肩風のもの(18・19)が圧倒的に多いが、稀に(20)のように撫で肩風のものもある。

D 平瓦(22～29)

平瓦は、基本的に、凸面布目平瓦(22～25)のⅠ類と凹面布目平瓦(26～29)のⅡ類に分類するのが良いと考える。多量な凸面布目平瓦の存在が弥勒寺跡の最大の特徴で、これまでの平瓦のデータによれば、Ⅰ類とⅡ類の割合は6対4を示している。図示したⅠ類の(24)は、凸面が全面にわたり縦位に削られるもので、両側端が生きており、幅11.5cmと狭く、熨斗瓦的な使用をしたものであろう。また、

(25)は布目が4割程度、縦削りが6割程度のもので、右側の隅を切り落としている。(22)は凸面が全面縦削りがなされており、布目は残っていない。(23)はごく一部に削りがあるが、大半は布目が残っており、6枚の枋板や数cm間隔の布留め痕が観察できる。

凹面布目平瓦には、凸面に斜格子の叩きがあるもの(26・27)、縄叩きがあるもの(28)、非常にまれな存在であるが、Ⅰ類と酷似した縦位の削りを加えているもの(29)などがある。(28)は枋板痕が認められず、一枚作りの平瓦のようにみえる。

2 螺髪(第8図30～46、図版7)

いわゆる如来像の頭髪を表現した螺髪が、17点(内1点は表採)ある。平成元(1989)年の調査で第Ⅱトレンチから完形品が1点出土しており、高さ3.9cm、底径3.2cm、底面の穴の直径0.8～0.9cm・深さ1.5cmを測り、型もの(型作り)ではなく、手捏ね(手作り)製と見られる。

今回の出土品中、高さが分かるものが6点あり、(32)は3.4cm、(33・35)は3.6cm、(30)は3.7cm、(31・34)は3.8cmである。底径が確実に分かるものは4点あり、(35)は3.0cm、(30・36・37)は、いずれも3.3cmである。底面の穴の直径は0.7～0.8cm、深さは1.5～1.7cmである。約半数のものに、かすかではあるがヘラ状具の仕上げ痕が認められる。(36)には朱色のものが付着する。彩色の可能性はあるが、類例が他に無いので、今後の出土品を待って考察したい。

以上の観察結果をまとめると、螺髪の法量は、高さ3.4～3.9cm、底径3.0～3.3cm、底面の穴の直径0.7～0.9cm・深さ1.5～1.7cmの範囲内におさまリ、朱の彩色が部分的になされた可能性がある。

螺髪の螺旋を、頭髪の生え際から上へ向かってどちら巻きかを見ると、(30)の資料についてのみ上部から見た図を示したが、いずれも左巻きである。本来、仏典によれば如来の頭髪は右巻きとされている。この点については結語で触れることにする。

3 須恵器(第9図47～66、図版8～10)

須恵器には、7世紀後半頃に編年される、古墳時代の坏身をひっくり返した、いわゆるかえりのある蓋(47・48・49)があり、弥勒寺の創建時を示すものと考えている。そのほかの蓋類には、二重の宝珠のもの(50)、天井部に稜を有するもの(51・52・53・54)などがある。(55・56)は蓋類の天井部に直径4mm程度の穴が穿たれたものである。

第2表 瓦以外の遺物分類表

分 類		過去の計	H 9	H 10	H 9・10計	合 計
縄文	土器	115	22	0	22	137
	石器	98	22	12	34	132
弥生	土器	2	8	0	8	10
	石器	1	0	0	0	1
螺髪		1	10	6	16	17
土師器		567	238	15	253	820
須恵器		2,284	726	951	1,677	3,961
白 瓷(灰釉陶器)		979	474	708	1,182	2,161
緑釉陶器		0	2	0	2	2
白瓷系	山茶碗	1,768	1,982	1,590	3,572	5,340
	山 皿	274	260	224	484	758
	鉢	41	68	21	89	130
	甕	148	25	46	71	219
瀬戸・美濃		37	146	98	244	281
土師質土器		426	358	1,742	2,100	2,526
中国陶磁器		73	12	16	28	101
大窯製品		9	1	7	8	17
登窯製品		159	402	62	464	623
その他		39	23	15	38	77
不明		1,363	20	18	38	1,401
合 計		8,384	4,799	5,531	10,330	18,714

注：表中の「過去の計」とは、昭和28・31・62・63・平成元年度の出土品の合計数。「H 9・H 10計」は、今回の調査で出土した出土品の合計数。なお、平成14(2002)年に、講堂跡で螺髪が1点表面採取されている。本表には掲載していないが、本文中には、この1点も入れた17点を取りあつかっている。

坏類は、高台の無いもの(57・58・59・60)と高台を有するもの(61・62)がある。(59)には「常」と見られる墨書がある。(58・60)にも墨書があるが読めない。(62)の中央部には、直径数mmの穴があけられている。

(63)は一見、蓋類にみえるが、わずかに透かしの痕跡が見られ、高坏と考えられる。

(64)は火舎の皿部で、(65)はその脚部で、いわゆる獣足と呼称されているものである。

(66)は類例を知らず、今後の検討を待ちたい。

4 灰釉陶器<白瓷>(第9図67～73、第10図74～98、図版10～12)

(67・68)は長頸瓶、(69)は多口瓶、(70・71・72)は浄瓶や平瓶などの瓶類の口縁部、(73)はそれらの底部と見られる。これらのものは、灰釉陶器の古い段階(8～9世紀)に属するものであろう。

瓶類以外の灰釉陶器には、碗(74～87)、皿(88～96)、段皿(97・98)がある。碗の内(75～82)は、外面底部の糸切り痕が丁寧に消されている。(74・83・84・85・87)には糸切り痕が残る。(86)は小片で判定できない。皿では、(88・90・91)の外面底部には糸切り痕は残っていない。他のものは糸切り痕が残る。一般的に、糸切り痕が残るものは新しく、丁寧に消されているものは古いとされるが、同一の時期でも、両者が併存する場合もあり、単純に新旧は決めがたい。とすれば、高台の形状が新旧の判定の視点にせねばならないが、これも同一時期にバラエティーがあり、一義的な決定がむづかしい。ここでは資料提示に留め、個別の詳細な時期比定は、保留しておきたいが、高台の形状から見て、ほぼ灰釉陶器の全時期にわたるものが出ていると見て良いであろう。

今回の調査で出土した、灰釉陶器の中には多くの墨書が認められる。平成2(1990)年3月発行の『国指定史跡 弥勒寺跡 - 範囲確認発掘調査報告書Ⅲ -』の15ページに、「大吉?」と読めるものがいくつかあると記したが、今回の調査で、確実に「大寺」と読めるもの(90)が見つかり、いずれも「大吉」ではなく「大寺」の可能性が高い。(74・88)は「寺」、(79・80・82・83・84)は「大寺」のようである。(77)のように他の文字を墨書したのものもあるが判読できていない。その後の、弥勒寺西遺跡の調査では、8世紀後半頃の須恵器に、「大寺」と墨書したものが多数出土しており、この呼び名が相当期間使われたことが判明してきている。

(85・90・94)の内面底部の表面はなめらかで、黒色で、墨のような痕跡があり、転用硯のようである。

(86)の内面底部の表面はなめらかで、朱色の墨らしい痕跡があり、やはり転用硯と思われる。

5 緑釉陶器(第10図99・100、図版13)

段皿(99)と火舎(100)が出土している。段皿(99)は完形品で、口径9.5cm、器高1.9cmを測る。内外全面にやや濃い緑色の緑釉が施されている。(100)は底径推定約25cmの、四方に脚が付く火舎で、全面に濃い緑色の緑釉が施されている。図示していないが、他に碗類の胴部片と見られる緑釉陶器が2点ある。これらは寺院にふさわしい出土遺物で注目される。

6 平安土師器(第11図101～117、図版13・14)

碗(101～105)と皿(106～117)に分類した。

碗の(101～103)は高台が高く2cm近くあり、底部が分厚く1.5cm程度ある。外面底部の糸切り痕は消されている。(104・105)は他のものに比べて底径が最も大きく6cm前後あり、外面底部には明瞭な糸切り痕がある。いずれも内面のみにタール状のものが付着する。

皿の(106～108)は1cm程度の高さの高台が付く深みのある皿で、糸切り痕は見られない。内外面にタール状のものが付着する。高台の無い皿は2グループに分けられ、(109～113)は深い皿で、器高は(109)で3.2cm、底径は4.7～5.2cmを測る。このグループに比べ、(114～117)は浅い皿で、器高は1.3～2.2cmと低く、底径も4.0～4.3cmと小振りである。

関市域における平安土師器の編年の基準資料とできる好例として、次の2例がある。

一つは、重竹遺跡B地点852号土壌の一括資料である。この土壌からは、平安中期に編年される灰釉陶器と伴出して、碗、皿、甕の土師器10点が出土している。他の一つは、重竹遺跡B地点55号土壌の一括資料で、平安末期から鎌倉初期に編年される山茶碗に伴出して脚付きの皿、2種類の皿など9点が出土している。これらの他にも、鎌倉・南北朝時代の中世土師器の編年の基準資料となる土壌出土の一括資料を平成3(1991)年度発行の『新修関市史 考古・文化財編』にまとめているので参考にされたい。

上記の2例の平安期の基準資料と比較するに、852号土壌から深い皿と浅い皿が出土しており、弥勒寺跡出土のものは同様な組み合わせをもつようで、平安中期に位置づけられよう。高台のある類については、比較資料が無いが、直角三角形的な高台の形状は、平安中期の灰釉陶器の高台に類似し、ほぼ同時期のものと推測しておきたい。

7 中世土師質土器(第11図118～133、図版14)

中世土師器は、大小の皿類と羽釜(133)の3種類がある。大きい皿は、底部と体部が均一の器厚のもの(118～123)と、底部に比べ体部が厚いもの(124～127)に分けられる。小皿には、深いものと、浅いものがあるが一線を引きにくい。

関市域の中世土師質土器は、下有知の重竹遺跡で大量に出土しており、山茶碗との伴出状況から、ほぼ鎌倉・南北朝時代の編年ができる。弥勒寺跡出土の、大きい皿の内、器厚が均一のものは、13世紀に位置づけられている白土原1号窯期・明和1号窯期に伴い、体部の厚いものは14世紀に位置づけられている大畑大洞4号窯期・大谷洞14号窯期に伴う時期のものであろう。

8 中世美濃須衛陶器(第11図134、図版15)

(134)は水注で、胎土が厚く重い。内部には骨片が納められており、骨壺として使用されたものである。重竹遺跡でも出土しているが、類例は稀である。

9 中国陶磁(第11図135・136、図版15)

青磁の連弁文碗(135)、玉縁口縁の白磁碗(136)などが出土している。これらは、13～14世紀に比定されるものである。古代の寺院が廃絶後も中国陶磁を購入できるレベルの「弥勒寺」として稼働していたことを物語るものであろう。

10 山茶碗＜中世白瓷系陶器＞(第12図137～159、図版15・16)

山茶碗のほぼ全時期のものが出土している。(137～148)は碗類で、東濃地域の編年によれば、(137・138)は白土原1号窯式に、(139～141)は明和1号窯式に、(142・143)は大畑大洞4号窯式に、(144)は大谷洞14号窯式に、(145～147)は大洞東1号窯式に、(148)は脇之島3号窯式に比定できよう。

(149～159)は皿類で、(149～151)には高台があり、谷迫間2号窯式に、(152～154)は深みのあるもので、浅間窯下1号窯式～窯洞1号窯式あたりに、(155・156)は白土原1号窯式に、(157)は明和1号窯式～大谷洞14号窯式あたりに、(158・159)は大洞東1号窯式～脇之島3号窯式あたりに比定できる。

第12図中、底部の図を示したものは、墨書が認められる資料である。どの資料も判読できていないが、幅広い時期にわたり、墨書の風習があることが注目される。本図に示した大半は、東濃地域の窯場で焼かれたものと見られる。全時期にわたる山茶碗の存在は、中世のほぼ全時期にわたり、堂宇の種類・規模・配置は全く分かっていないが、「弥勒寺」としての機能を果たしていたことを物語っており、その具体的内容の解明も今後の課題の一つである。

11 中世陶器(第13図160～167、図版17)

古瀬戸(160～166)と常滑焼(167)がある。(160)は花瓶の口縁部で古瀬戸中期に、(161)は折縁深皿で古瀬戸中期後半に比定される。(162)は四耳壺、(163)は水注、(164)は水差し、(165)は播り鉢口縁部、(166)は播り鉢底部で、これらはいずれも古瀬戸後期に編年される。

(167)は受け口状の口縁部を有する常滑の甕で、格子状の叩き具痕が4段にわたり認められる。第Ⅲ段階前半に比定でき、13世紀後半のものであろう。

12 その他(第13図168～170、図版17)

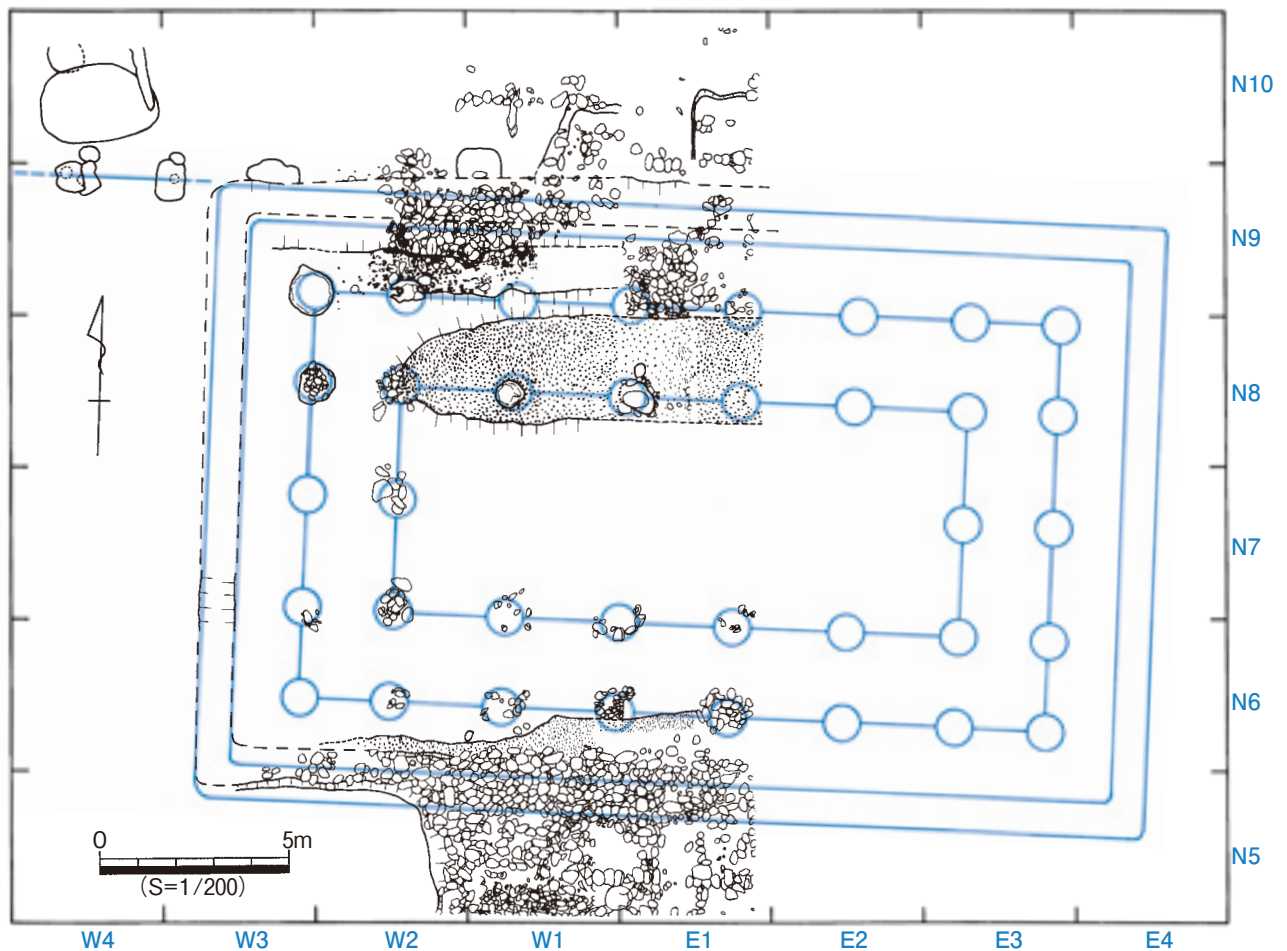
11項まで述べた遺物以外に、その他と分類した出土品があり、ここには五輪塔(168・169)と寛永通宝(170)を取り上げた。五輪塔の(168)は空輪・風輪、(169)は水輪である。火輪や地輪がおそらく周辺に埋もれているのであろう。この地が、ある時期から墓所として利用されていたことを物語るものとして注目される。なお、現在の弥勒寺の墓地(円空以後、12代目までの住職や一部親族の墓)にも五輪などが見受けられ、今後の調査課題の一つである。

(170)は寛永通宝の裏面に11波のあるもので、1769年以後の鑄造と見られる。地表から65cmほどの深さから出土しており、水田構築の客土に含まれていたものである。今回調査した区域の水田がいつ開田したものか、長年の疑問であったが、この寛永通宝は、円空がこの地に草庵を結んだ元禄2(1689)年ころよりも少なくとも80年ほど後の時期のものであり、円空以後の何代目かの住職の在任中に開田されたものと見られる。開田の時期を厳密に追求するためには、いわゆる連房式の登り窯製品の時期を詳細に検討する必要がある。

Ⅳ 結 語

1 講堂について

講堂の規模は梁行4間、桁行7間と推定され、主軸は、北で東へ $1^{\circ}30'$ ほど振れ、極めて真北に近いものと推測しているが、最終的な主軸方向や規模は、東側半分の調査を待って決定したい。また、南辺の集石を詳細に検討し、階段などの構造を明らかにすることと、未だに不明の回廊が講堂とどのような形で配置されているかなど、追求しなければならない大きな課題が残っている。



第4図 講堂復元図

2 螺髪について

螺髪は、過去の調査では、わずかに1点しか出土していなかったが、今回の調査で16点が出土し、その後、1点が講堂後の付近で表面採取された。いずれも、手握ねによる製作ではあるが、高さ3.4～3.9cm、底径3.0～3.3cm、底面の穴の径0.7～0.9cm、底面の穴の深さ1.5～1.7cm程度で、一定の大きさを意識して製作していることが分かる。

多くの螺髪の出土に刺激され、全国的に類例を求めたところ、岡山大学の亀田修一・葉穂子夫妻が『網干善教先生古稀記念考古学論集』(平成10(1998)年3月)に掲載された論文「塑像螺髪に関する覚

書」を知った。これによると、全国で33ヶ所の遺跡から出土しており、型作りと手捏ねの両者があり、螺旋の方向も右巻きと左巻きのものがある。なお、弥勒寺跡出土の螺髪の高さであると丈六仏が想定され、座像の場合では2.5m程度の大きさと推定できるという。

亀田論文以後のもので管見に上る出土遺跡例を第3表に示しておいた。それぞれ一例のみであるが、木製の螺髪の出土例、粘土製の型枠の出土例があり注目される。

螺旋の方向については、本来、仏典によれば、お釈迦様の螺髪は右巻きとされているが、弥勒寺跡の出土品はすべて左巻きであり、他の遺跡例も両者が混在し、製作時に必ずしも従うべき儀軌として認識されていなかったようである。なお、報告書によっては、「右巻き」と「左巻き」の判断基準に相違が見受けられるが、筆者は頭髪の生え際から先端へ向かってどちらに巻くかで判定した。第3表には、この基準で、報告書に左巻きと書いてあっても、右巻きとしたものがある(あるいは、その逆の場合もある)。

弥勒寺跡の今後の調査では、螺髪以外に、塑像の他の部分の発見が期待される。

3 灰釉陶器にみる「大寺」の墨書

今回の調査では、「大寺」と墨書のある9～10世紀の灰釉陶器が数多く出土した。その後の円空館建設に伴う、平成14(2002)・15(2003)年度の弥勒寺西遺跡の調査では、「大寺」と墨書された8～9世紀の須恵器が出土している。しかし「大寺」は固有名詞とは考えられない。文献上では、南北朝時代に、本寺が「弥勒寺」と呼ばれていたことが、揖斐郡横蔵寺蔵の「大般若経卷第五百五十六」の奥書「永和四(1378)年卯月七日武儀郡池尻郷弥勒寺」などにより分かっているが、古代における本寺の名称は未だ明らかになっていない。

螺髪が出土したことにより、古代の本寺のご本尊は、如来であったようであるが、なに如来かは分からない。弥勒菩薩は時に、弥勒如来として造像されることがあり、弥勒如来を本尊とする「弥勒寺」であった可能性もある。あるいは郡名を付した武義寺であったのかも知れない。何時の日か、古代の本寺の正式名称が発掘調査を通して判明することを楽しみにしている。

4 新種の軒丸瓦について

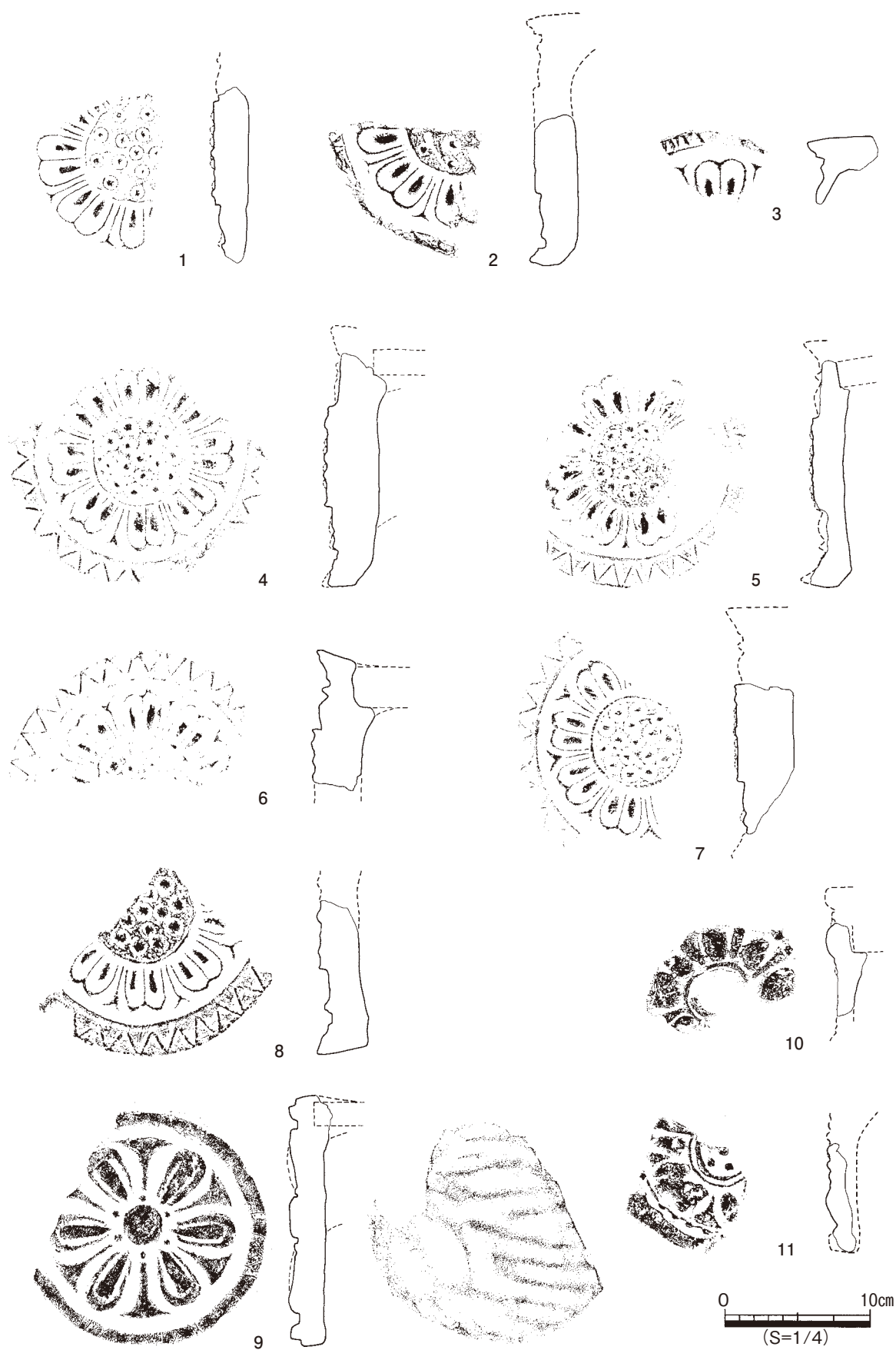
Ⅲ類とした軒丸瓦は、いわゆる湖東式と呼ばれる型式で、近隣では岐阜県加茂郡坂祝町の輪形古窯、岐阜県美濃加茂市元薬師寺跡などで出土している。この瓦は弥勒寺跡から、これまでにわずか2片しか出土していない。また、Ⅳ類の平安期と考えられるものも2例ほどで、特定の建物に使用したり、補修に用いられたとするには数が極端に少ない。これらの軒丸瓦がどのような理由でここにあるのか、解釈に苦慮している。凸面布目平瓦や四重弧文軒平瓦などは、美濃市の丸山古窯で焼かれたことが分かっているが、主に使用されている複弁蓮華文軒丸瓦に加え、今回出土した軒丸瓦も、どこで焼かれたものか、新たな課題を抱えることになった。

第3表 螺髮出土遺跡一覽表

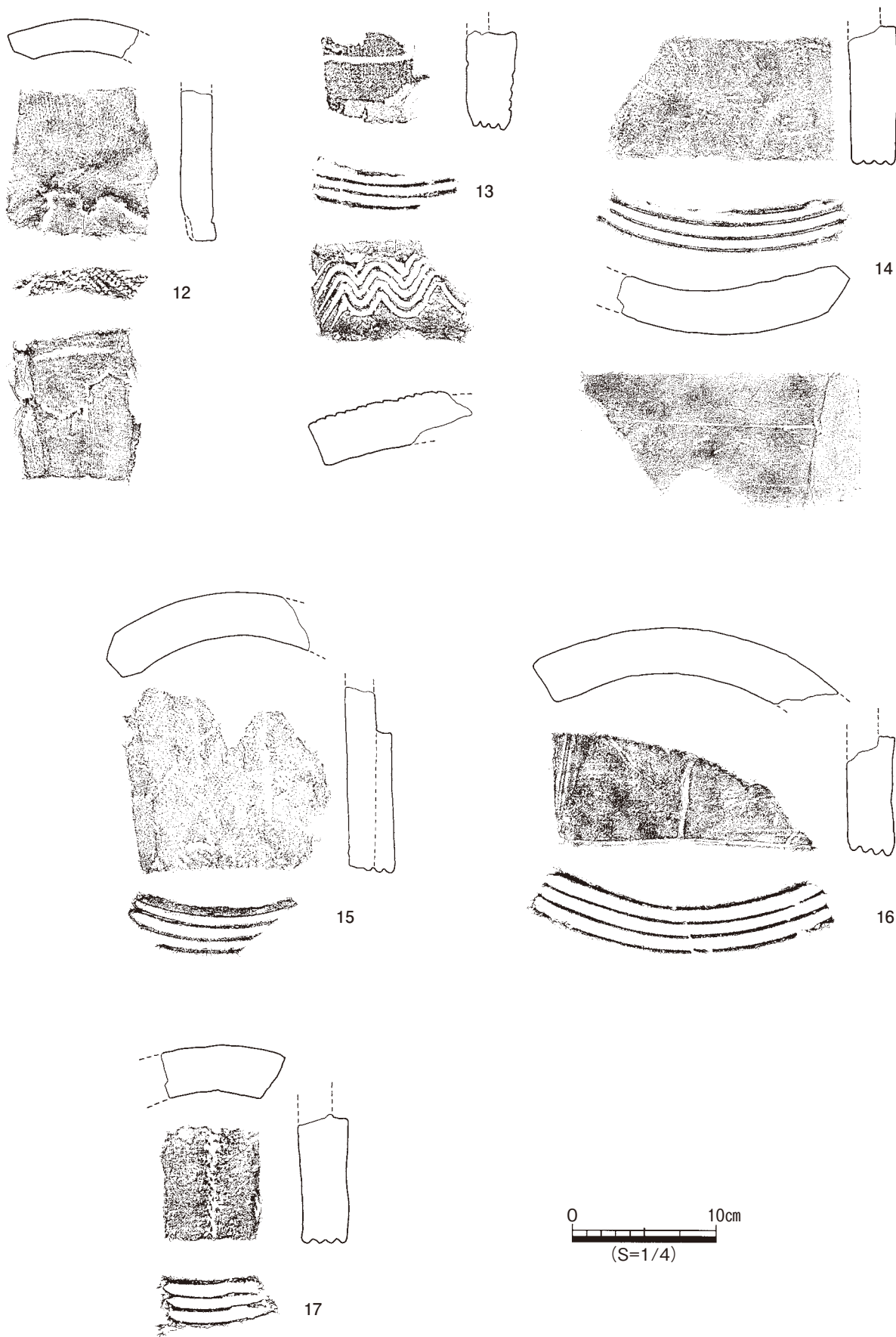
	遺 跡 名	国 名	点数	高さ	底径	底穴	穴径	穴深	形 型	巻	巻数	創建時期	備 考	文 献	
01	下野薬師寺跡	下野(栃木県下野市)	5	2.8～3.7	3.2～3.6	+	図0.4、0.8	貫通	砲弾	－	右	4～6	7世紀末	2点鉄棒が縦に貫通。上から下に螺旋を施文。	栃木県教委『下野薬師寺跡発掘調査報告』1973。国士舘大学考古学研究室『栃木県南河内町下野薬師寺』1994。
02	十三宝塚遺跡	上野(群馬県伊勢崎市)	2	2.2・2.6	2.0	－	－	－	円錐A	?	?	?・3	?		群馬県教委文化財保護課『十三宝塚遺跡発掘調査概報Ⅱ』1976。
03	峯崎遺跡	下総(茨城県結城市)	1	2.0	1.5	+	図0.8	図1.0	円錐A	－	右	6	?	9世紀後半の住居跡竈内。結城廃寺関連?	山武考古学研究所『峯崎遺跡』1996。
04	宿宮前遺跡	武蔵(埼玉県さいたま市)	1	2.9	2.7	?	?	?	円錐B	?	左	?	平安?		埼玉新聞 1991.12.17。
05	寺内廃寺	武蔵(埼玉県江南町)	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	8,9世紀?	金堂。	新井満「埼玉県大里郡江南町寺内廃寺」『日本考古学年報45(1992年度版)』1994。
06	琴字山遺跡	三河(愛知県岡崎市)	10	1.2～1.4	1.2～1.6	－	－	－	特異	+	右	3	?	採集資料。螺旋の下部に1 cmの面。2種の木型。	新編岡崎市史編集委員会『新編岡崎市史 史料考古外16』1989 p525。
07	市道廃寺	三河(愛知県豊橋市)	1	1.6	1.3	－	－	－	円錐A	?	右	4?		寺院。	東愛知新聞 1994.9.26。シンポジウム報告書「天武・持統朝の寺院造営－東日本－」帝塚山大学考古学研究所 2007.10.21。
08	清林寺遺跡	尾張(愛知県甚目寺町)	1	2.4+	2.0	－	－	－	円錐C	+	右	5	7世紀	側面が直線的。報告書には泥塔と記。	愛知県甚目寺町教委『甚目寺町文化財調査報告Ⅰ』1983。
09	天花寺廃寺	伊勢(三重県松阪市)	1?	4.0+	2.6～2.9	+	?	?	円錐A	?	右	6	7世紀		三重県教委「一志郡嬉野町天花寺廃寺」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告書』1981。
10	夏見廃寺	伊賀(三重県名張市)	60	5.4～7.0	4.0～4.7	－	－	－	砲弾	+	右	7	7世紀	8世紀中葉創建の講堂須弥壇で60点以上出土。	三重県名張市教委『夏見廃寺』1988。
11	穴太廃寺	近江(滋賀県大津市)	2	4.0	4.0	+	0.2	0.3	円錐B	+	左	4	7世紀	再建講堂須弥壇西寄りで6点出土。漆塗り。	林博通「穴太廃寺」小笠原好彦・田中勝弘・西田弘・林博道『近江の古代寺院』1989。
12	安倍寺跡	大和(奈良県桜井市)	1	2.5	2.1	－	－	－	円錐B	+	右	3	7世紀		橿原考古学研究所『阿部寺跡環境整備事業報告－発掘調査報告書－』1970。
13	駒帰廃寺	大和(奈良県宇陀市)	200						円錐	+	右	5	8世紀前	金堂からの出土。	奈良県菟田野町教委『駒帰廃寺(伝安楽寺跡)発掘調査概要』1971。
14	川原寺裏山遺跡	大和(奈良県明日香村)							円錐	+	両		7世紀	大中小がある。	奈良国立博物館『飛鳥の埴仏と塑像－川原寺裏山出土品を中心として－』1976。
15	九頭神廃寺	河内(大阪府枚方市)	1	2.5	2.0	－	－	－	円錐A	+	左		7世紀		(財)枚方市文化財研究会『九頭神遺跡見学会』1985。
16	新堂廃寺	河内(大阪府富田林市)	2	3.5	3.0	－?	－	－	円錐	?	右		7世紀	鳥含寺とも言う。	大阪府教委『河内新堂鳥含寺跡の調査』1961。
17	芥川廃寺	摂津(大阪府高槻市)													京都府高槻市史編さん委員会「芥川廃寺」『高槻市史第6巻考古編』1973。
18	佐野廃寺	紀伊(和歌山県かつらぎ町)	数点	3.2	2.1	－?	－	－	円錐A	?	右		7世紀	講堂。	社団法人和歌山県文化財研究会『昭和52年度佐野廃寺跡発掘調査現地説明会資料』1986。
19	広渡寺廃寺	播磨(兵庫県小野市)	4	2.8～3.2	2.1～ 2.2	－	－	－	円錐A	+	右	6～7	7世紀	金堂基壇上で出土。	広渡寺廃寺跡発掘調査団『播磨広渡寺廃寺跡発掘調査報告』1980。
20	殿原廃寺	播磨(兵庫県加西市)	1	2.6	1.9	+	?	?	円錐A	?	左?		7世紀		兵庫県加西市教委『殿原廃寺(第4次)』1993。
21	服部廃寺	備前(岡山県瀬戸内市)	7	3.0	2.7	－	－	－	円錐B	+	右	5	7世紀末	金堂須弥壇で出土。数字は最大のもの。	山陽新聞 1999.4.25。
22	久米廃寺	美作(岡山県津山市)	15	1.8～2.9	1.9～2.5	+	0.7～1.0	1.6～2.0	円錐	+	右	4～6	7世紀末	塔・金堂周辺で出土。平面形楕円、下面斜。	岡山県教委「久米廃寺(補遺編)」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査(補遺編)』岡山県埋文報告(24) 1978。
23	楢原廃寺	美作(岡山県美作市)											7世紀後	塔基壇南側。	楢原廃寺跡発掘調査団『楢原廃寺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋文報告(13) 1976。
24	康德寺廃寺	備後(広島県世羅町)	11	2.3～3.7	1.8～2.3	－	－	－	円錐A	±	左	6～11	7世紀後	手捏ねと型の2種。塔基壇と周辺出土。朱彩?	広島県世羅町教委『備後康德寺廃寺発掘調査報告書』1995。
25	本郷平廃寺	備後(広島県尾道市)	2	2.9・3.5	1.8～1.9	－	－	－	円錐A	?	右	6～7		塔北側。金堂南側。	広島県御調町教委『本郷平廃寺』1989。
26	大井大寺廃寺	長門(山口県萩市)	1	3.5	2.6～2.9	+	0.8	0.2	円錐A	?	右	5			山口県教委『大井大寺廃寺』1985。
27	土師百井廃寺	因幡(鳥取県八頭町)	3	4.6～4.9	2.8～3.5	±	0.75	1.0	円錐A	?	右	5～6		金堂周辺出土。1点のみ底穴あり。	鳥取県郡家町教委『土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅰ』1979。
28	斎尾廃寺	伯耆(鳥取県琴浦町)	22	2.8～3.2	2.0～2.4	－	－	－	円錐A	+	両	6～8		22点出土。左記のデータはその内の7点のもの。	倉吉博物館「解説Ⅶ斎尾廃寺出土塑像」『埴仏』1992。
29	上淀廃寺	伯耆(鳥取県米子市)	49	2.5～3.9	1.3～3.2	±	?	?	円錐A・B	±	両	4～7		円錐Aは金堂東西2点、円錐Bは周辺47点出土。	鳥取県淀江町教委『上淀廃寺』1995。
30	大寺廃寺	伯耆(鳥取県伯耆町)	5	2.3～4.5	1.5～3.0	±	0.9～1.8	0.75	円錐A	±	右	5～6		金堂西南2点、回廊西南1点、中世溝2点出土。	鳥取県教委『大寺廃寺発掘調査報告書』1967。岸本町教委『大寺廃寺第4次発掘調査書』1977。
31	四天王寺跡	出雲(島根県松江市)	1	1.3+	1.3	－	－	－	円錐C	+	左	6		底が全体にややくぼむ。	島根県教委『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅴ』1983。
32	椿市廃寺	豊前(福岡県行橋市)	1	2.6	1.8	－	－	－	円錐A	?	左	9		講堂。	福岡県行橋市教委『椿市廃寺Ⅱ』1996。
33	法鏡寺跡	豊前(大分県宇佐市)	1	2.9	2.9	－	－	－	円錐	?	右	4			大分県宇佐市教委『法鏡寺跡・虚空蔵寺跡』1973。
34	上総国分尼寺	上総(千葉県市原市)	1	3.4	3.0							6	8世紀後	木製。鐘楼跡柱抜き取り穴。	(財)市原市文化財センター「1989年度発掘速報－上総国分尼寺跡の全容判明－」『私たちの文化財15』1990。
35	弥勒寺跡	美濃(岐阜県関市)	18	3.4～3.9	3.0～3.3	+	0.7～0.9	1.5～1.7	円錐A	－	左	5	7世紀後	講堂を覆う水田客土から出土。1点に赤彩あり。	岐阜県関市教委「国指定史跡 弥勒寺跡－範囲確認発掘調査報告書Ⅲ－」1990。
36	大御堂廃寺	伯耆(鳥取県倉吉市)											7世紀中	型枠。高さ4.2、底径2.8、左巻きを製作できる。	シンポジウム報告書「天武・持統朝の寺院造営－西日本－」帝塚山大学考古学研究所 2007. 6. 15。
37	尾張国分寺跡	尾張(愛知県稲沢市)	1	残2.2	残1.9				円錐	?	左	5以上	8世紀中		愛知県稲沢市教育委員会「尾張国分寺跡第10次調査」『稲沢市内遺跡発掘調査報告書(X)』2007 図版15。
38	東畑廃寺跡	尾張(愛知県稲沢市)	1	残2.4	3.3	?	?	?	?	?	右	?	7世紀後		愛知県稲沢市教育委員会「東畑廃寺跡(Ⅷ)」『稲沢市内遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』1996 帝塚山シンボ資料2007掲載。
39	寺本廃寺	甲斐(山梨県笛吹市)	4	2.7	3.3	－	－	－	円錐	+	右	4	7世紀後	報告書は左巻きとしている。	山梨県春日居町教育委員会「寺本廃寺 第1・2・3次発掘調査報告書』1988。帝塚山シンボ資料2007掲載。
40	来美廃寺	出雲(島根県松江市)	1	?	?	?	?	?	?	?	左	?	8世紀		島根県教委『来美廃寺』2002。帝塚山シンボ資料2007掲載。
41	興道寺廃寺	若狹(福井県美浜町)	1	残2.4	2.1	+	0.5	0.5	砲弾	+	右	5以上	7世紀末		「興道寺廃寺(10次調査)」－発掘調査現地説明会資料－ 2008.10.18。

※亀田修一・菜穂子「塑像螺髪に関する覚書」『網干善教先生古稀記念考古学論集』平成10(1998)年3月を改変・加筆。

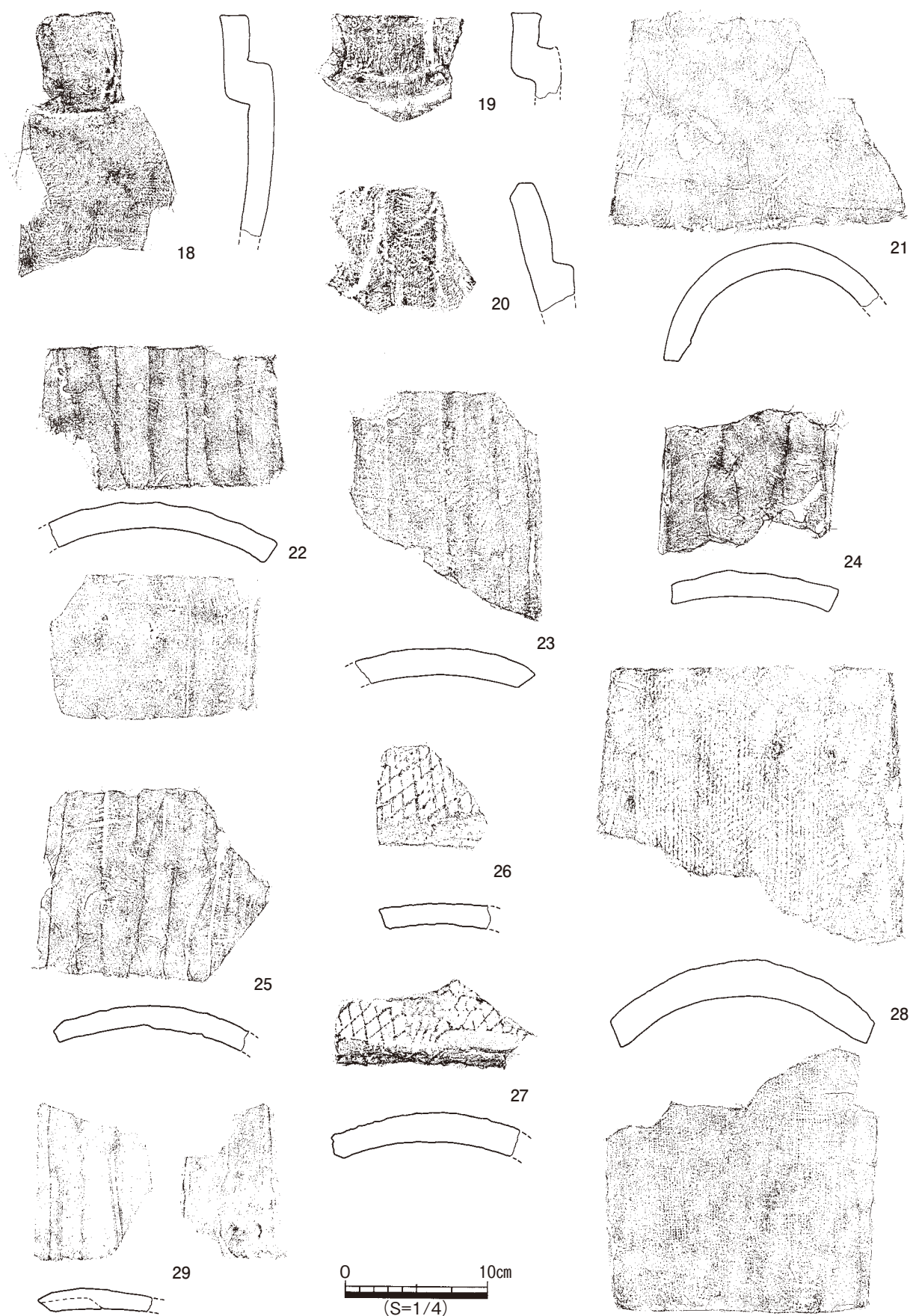
表中の「図」は、図からの測定値。亀田論文では、形別に一点ごとのデータが掲載されているが、本表では1遺跡1行にまとめているので、詳しくは亀田論文を参照されたい。



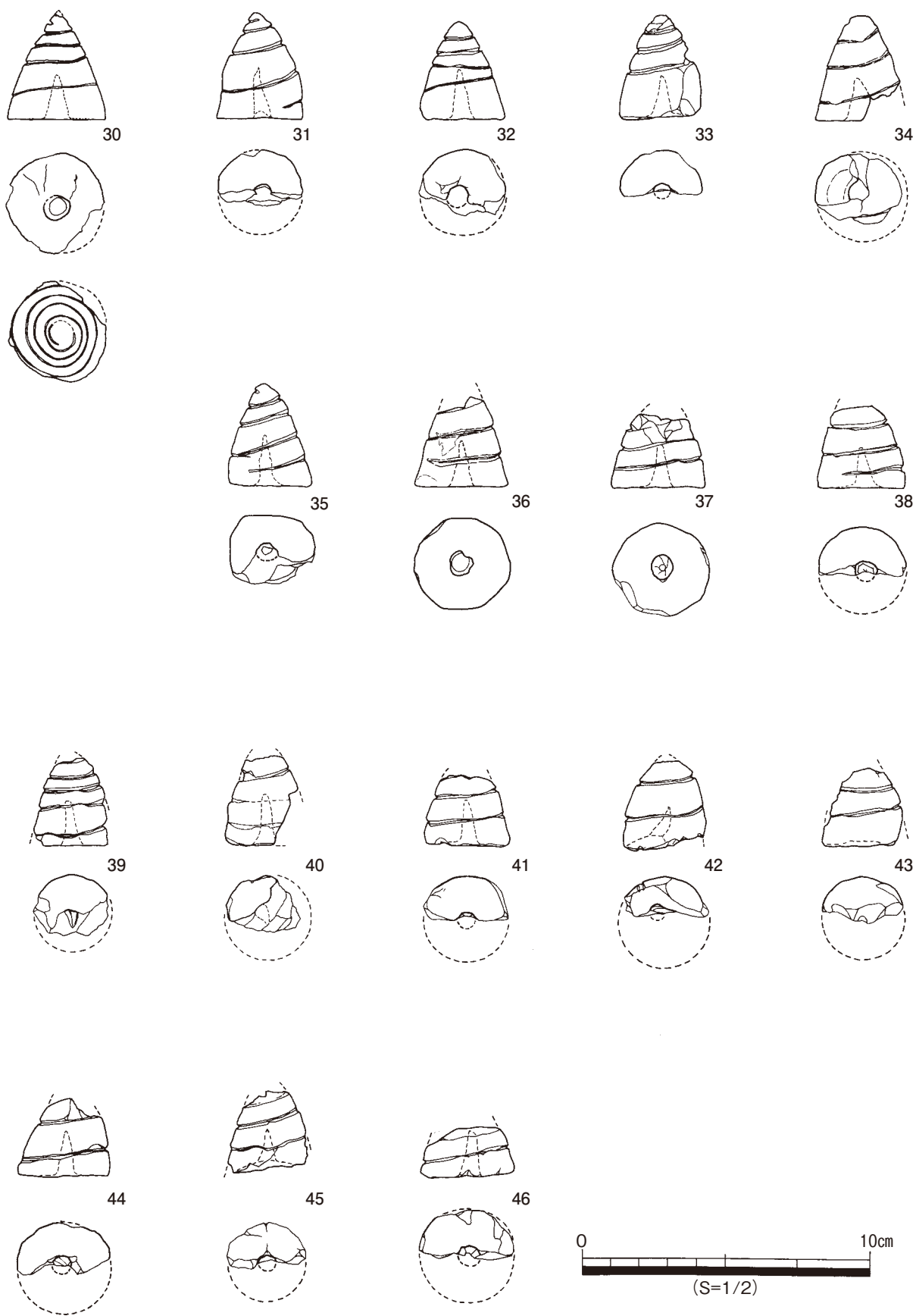
第5図 遺物実測図1 軒丸瓦



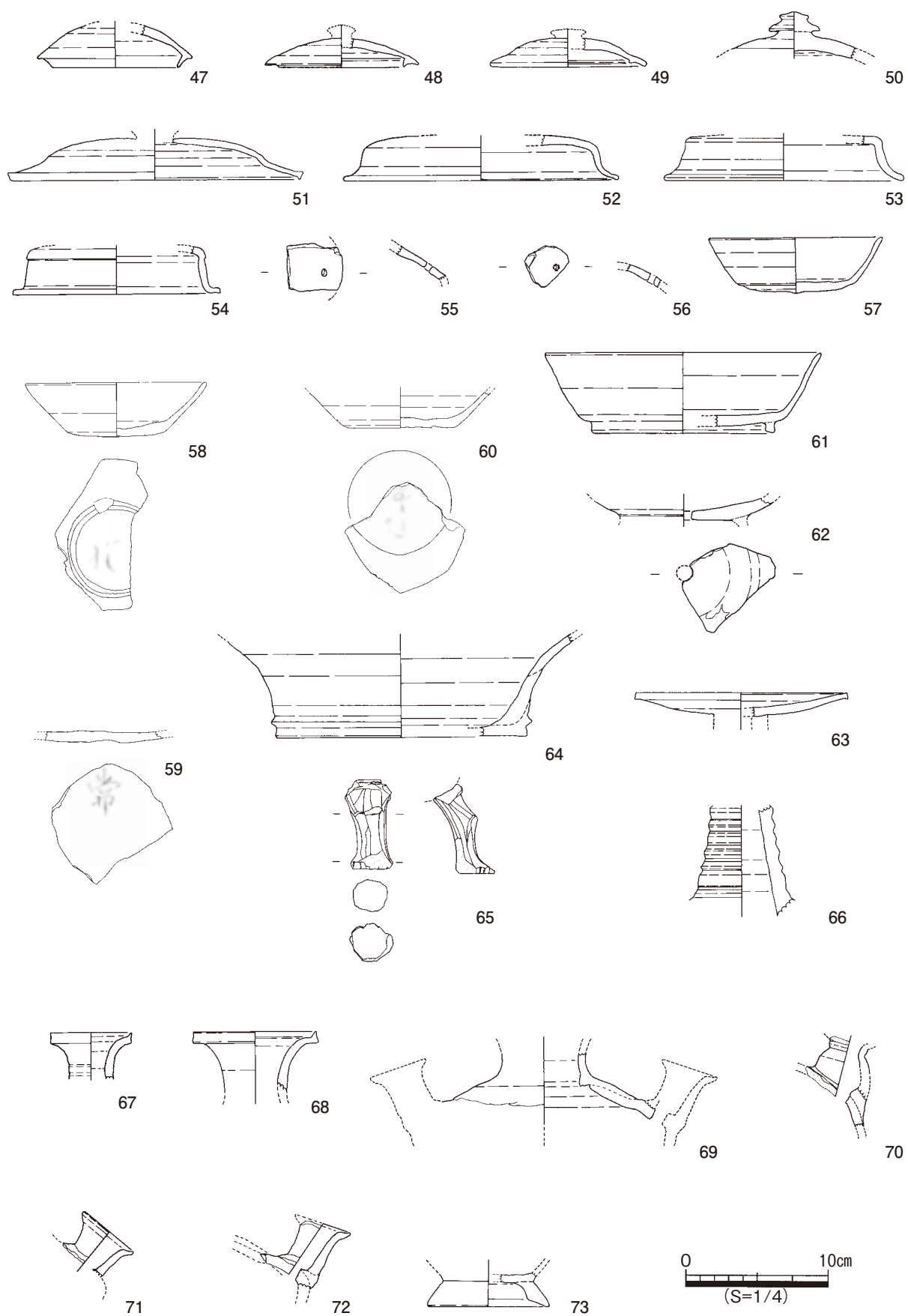
第6図 遺物実測図2 軒丸瓦丸瓦部・軒平瓦



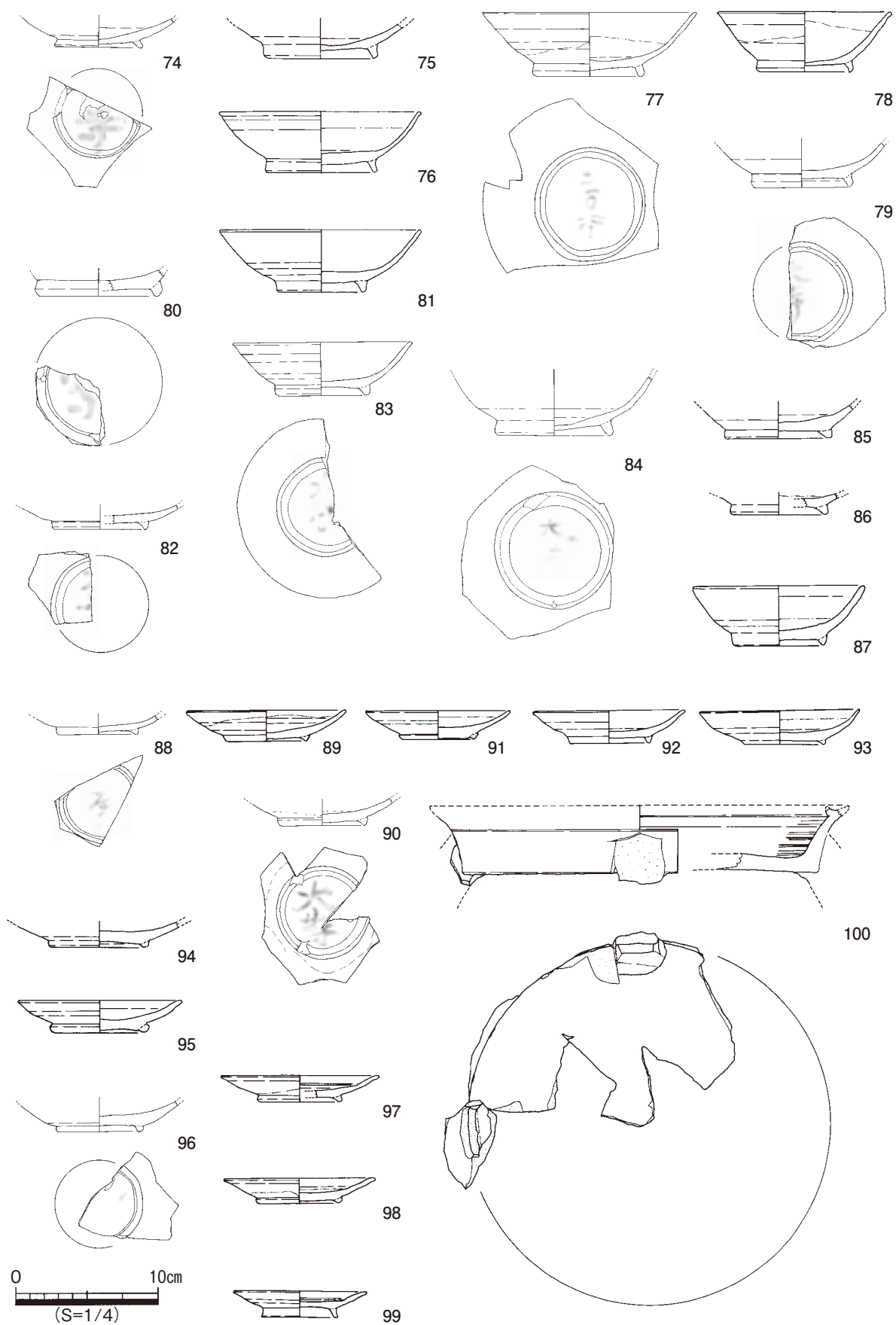
第7図 遺物実測図3 丸瓦・平瓦



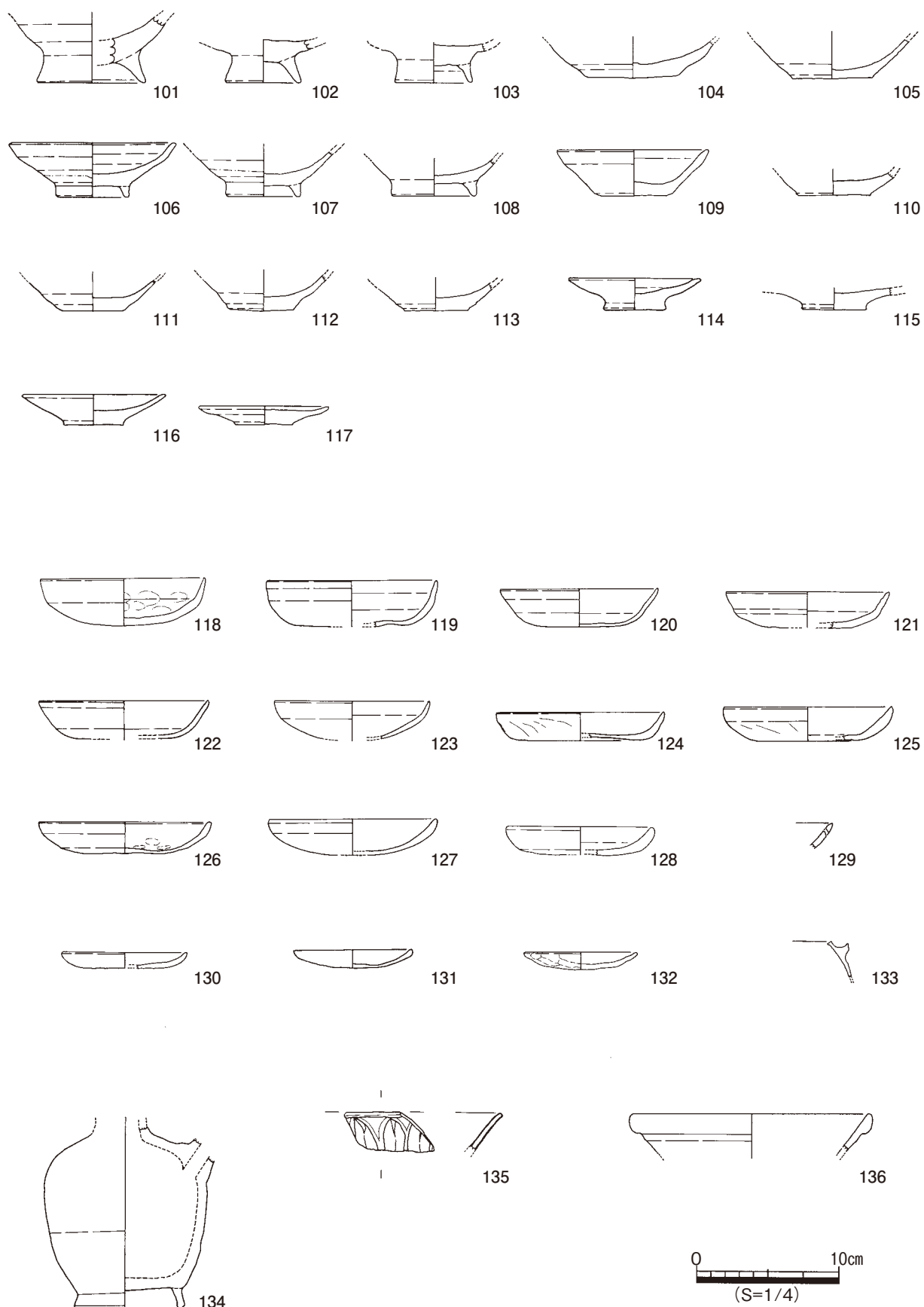
第8図 遺物実測図4 螺 髪



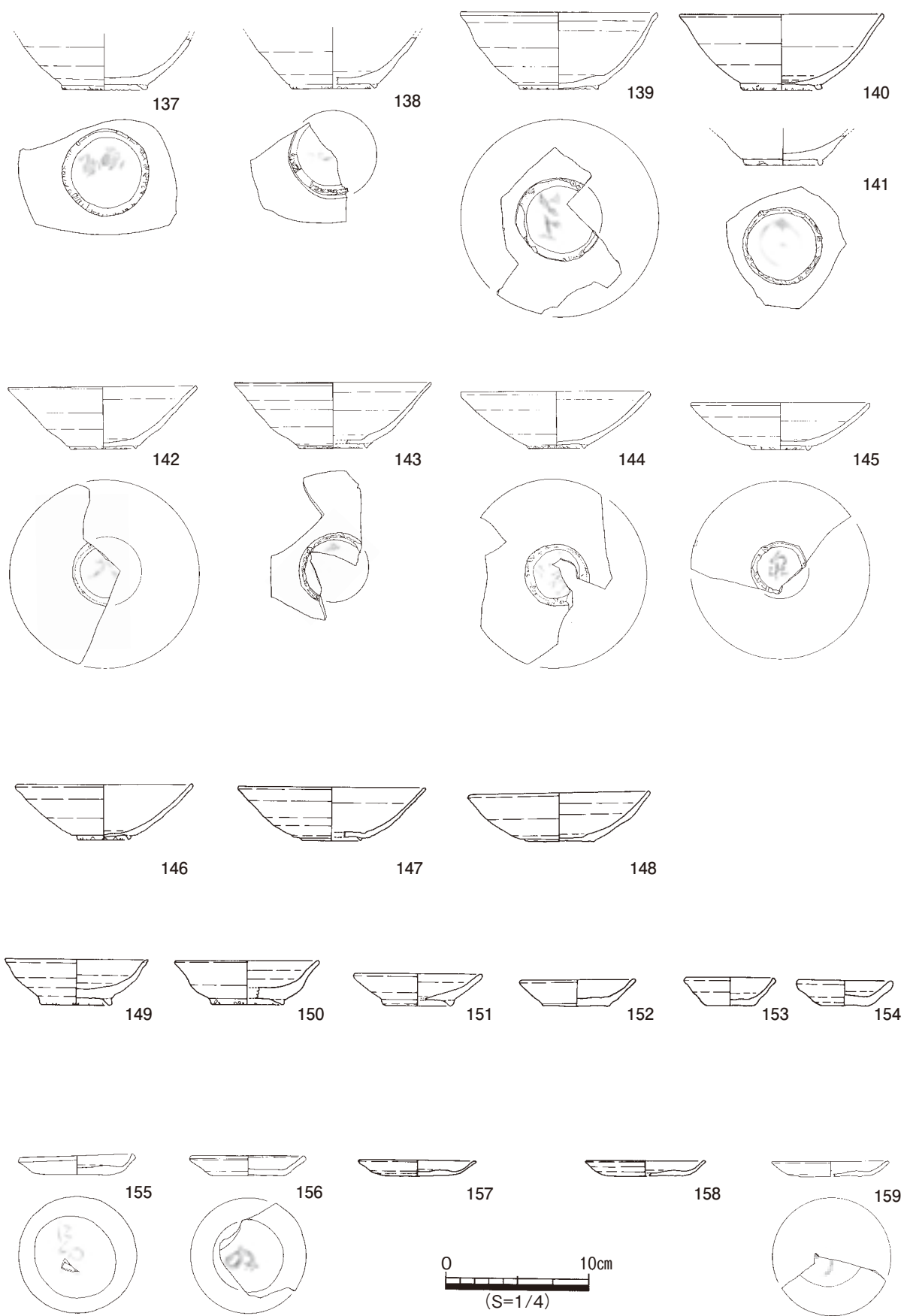
第9図 遺物実測図5 須恵器・灰釉陶器



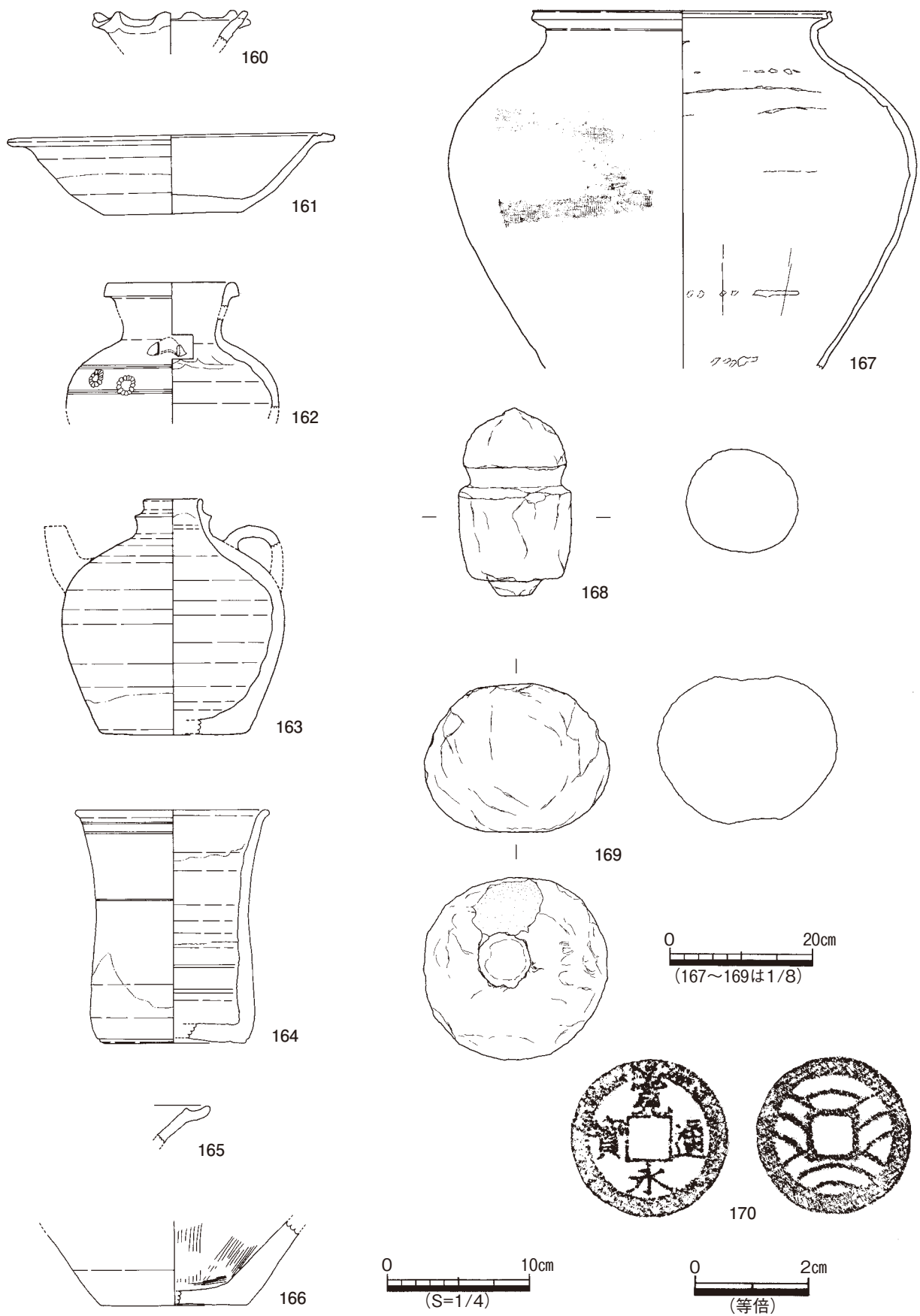
第10図 遺物実測図6 灰釉陶器・緑釉陶器



第11図 遺物実測図7 平安土師器・中世土師質土器・中世美濃須衛陶器・中国陶磁



第12図 遺物実測図8 山茶碗



第13図 遺物実測図9 古瀬戸・常滑・五輪塔・寛永通宝

図版 1



1 基壇とそれを覆う南北の土層断面（南西より）



2 基壇とそれを覆う東西の土層断面（南より）

図版2



1 西半分の主要部分全景（南より）



2 南辺の焼土と集石（西より）



3 南の集石中の石列（東より）

図版 3



1 北西全景（東より）



2 南の集石中の石列



3 根石



4 根石



5 近世の遺構

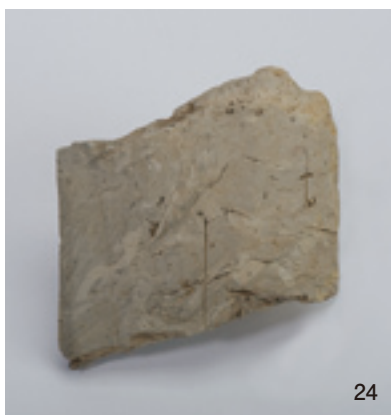
图版 4



图版 5



图版 6



图版 7



29



30



30

31

32

33

34



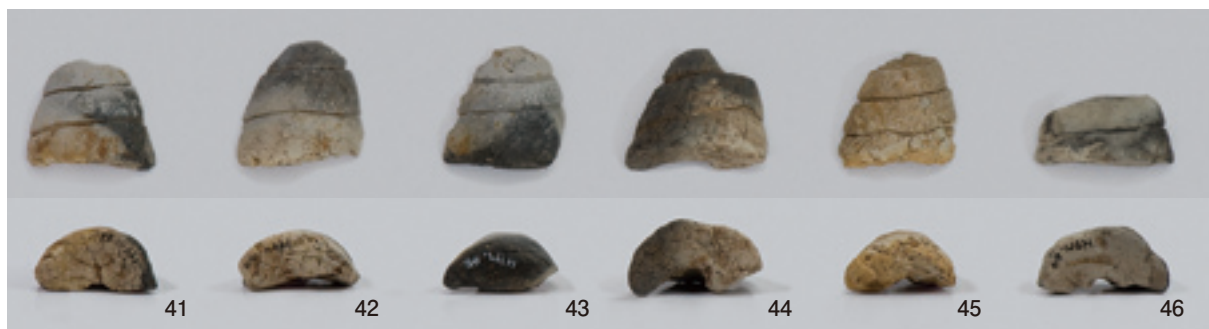
36

37

38

39

40



41

42

43

44

45

46

图版 8



图版 9



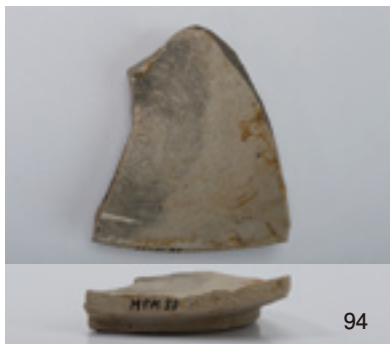
图版10



图版11



图版12





99



※矢印 弥勒寺西遺跡（2002年調査）から出土した破片

100



101



102



103



104



105



106



107



108

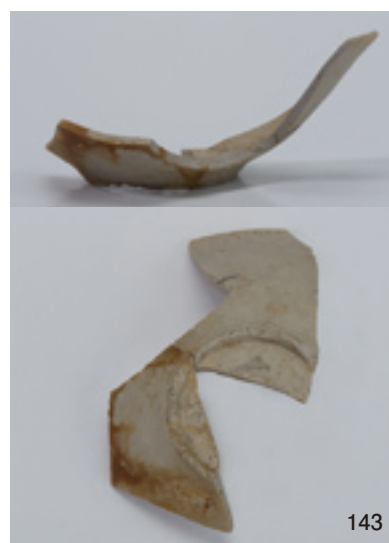


109

图版14



図版15



※140は次頁

图版16



图版17



報告書抄録

ふ り が な	くにしていしせき みろくじかんがいせきぐん みろくじあと							
書 名	国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺跡							
副 書 名	講堂跡発掘調査 平成9・10年度							
シ リ ー ズ 名	関市文化財調査報告							
シリーズ番号	第26号							
編 著 者 名	篠原英政							
編 集 機 関	関市教育委員会							
所 在 地	〒501-3894 岐阜県関市若草通3丁目1番地 TEL 0575 (22) 3131							
発 行 年 月 日	西暦2009年2月10日							
所 収 遺 跡 名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号						
国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺跡	岐 阜 県 関市池尻字 弥勒寺	21205	G27S04140	35° 30′ 9″	135° 53′ 42″	1998.1.7～ 2.19, 12.18 ～1999.3.30	480㎡	史跡整備
	主な時代	種別	主な遺構	主な遺物		特記事項		
	白鳳 奈良 平安 中世	寺院跡	講堂跡の礎石・根石・ 階段状遺構、中世溝状 遺構	瓦、螺髪、須恵器、 灰釉陶器、緑釉陶器、 平安土師器、中世土 師質土器、中世美濃 須衛陶器、中国陶磁、 山茶碗、古瀬戸、常 滑、五輪塔、寛永通 宝		・ 講堂の配置が、礎石 と根石からほぼ判明。 ・ 岐阜県下では他に 出土例のない螺髪が16点 出土。 ・ 中世の段階で、講堂 基壇に砂利が敷き詰め られ、溝が掘り込まれ ていることが判明。		
要 約	弥勒寺跡の塔と金堂の規模は、昭和28(1953)年と31(1956)年の調査で判明したが、講堂については具体的な内容は全く不明で、土層の変化から塔と金堂の北側に存在することが指摘されていた。平成元(1989)年度のトレンチ調査では、基壇の残存と元位置を保つ礎石が一個存在することが判明し、面的な調査を実施すれば規模を明らかにできると予想された。今回の講堂跡西側半分の調査では、新たに礎石や根石が発見できたことにより、その規模がほぼ判明した。より正確に知るためには、東側半分の調査が必要である。							

関市文化財調査報告第26号

国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群

弥勒寺跡

－講堂跡発掘調査 平成9・10年度－

2009年2月10日 発行

編集・発行 関市教育委員会
〒501-3894 関市若草通3丁目1番地
TEL (0575) 22-3131 (代)

印刷 協同印刷株式会社

